JURNAL UPI

JAPANEDU:
Jurnal Pendidikan dan Pengajaran Bahasa Jepang
http://ejournal.upi.edu/index.php/japanedu/index

An Inquiry on Japanese Language Education in Indonesia
A focus on the curriculum and its' implementation

Mutia Kusumawati
Teaching Japanese as A Second Language Department, Graduate School of Education, Hiroshima University
mutia.kusu21@gmail.com

ABSTRACT

The number of Japanese language learners in Indonesia has reached second place in the world (The Japan Foundation, 2015). However, Japanese language skills of learners in Indonesia are still very far behind from other countries, especially China and South Korea. Therefore, this study aims to discuss the causes of the lack of development on Japanese language learning abilities in Indonesia with the curriculum approach used. To answer these problems, author analysed data by The Japan Foundation, interviewed Japanese language teachers at one national high school in Bandung, and reviewed the curriculum that was being used. The results showed that most of Japanese language learners in Indonesia are at the secondary education level and mostly are high school students. However, the purpose of the Japanese language teaching curriculum in high schools in Indonesia does not require students to master Japanese to the upper level. Therefore, even though the number of Japanese language learners in Indonesia is large, but because the target of language acquisition is low, the Japanese language ability also tends to be low.

KEYWORDS

Curriculum; High school; Indonesia; Japanese education; Secondary education

ARTICLE INFO

First received: 11 April 2019 *Final proof accepted: 27 June 2019*
Available online: 28 June 2019

はじめに

日本はアジアの国々の中でも科学、技術、経済的に最も発展した国である。そのため、日本の技術を学習する、日本と貿易するなどのために、日本語を学習する外国人が多い（図 1 をご参照）。インドネシアでは第二次世界大戦の時代から日本語が既に学習されていたが、今日、インドネシアの日本語学習者は急激に増加してきた。図 1 を見ると、1979 年から 2003 年にかけてはインドネシアの日本語学習者数は横ばい状態であった。

e- ISSN 2528-5548

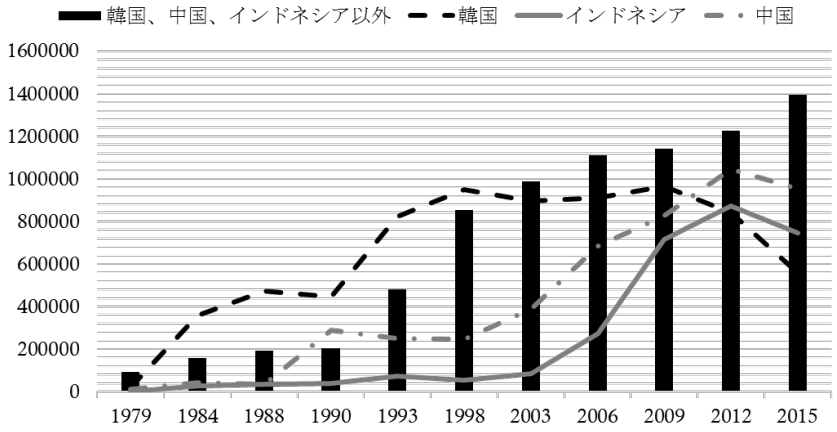

図 1　国際交流基金（2016）による国・地域別日本語学習者数の推移

しかし、2006 年にはわずかに増加し、2009 年には 716,353 人に達した。さらに、2012 年にそれまで世界２位であった韓国の学習者数を上回り、840,187 人となった。2015 年にはやや減少したが、人数は 2009 年に比べるとより多いことが見られる。これらのことから、インドネシアの日本語学習者数は、世界 3 位から 2 位となっていることが分かる。

このように、学習者数が非常に多いが、インドネシア人日本語学習者の能力には課題がある。表 1 は国際交流基金（2015）による日本語能力試験の実施国・地域別受験者数を表したものである。

N1 は日本語能力試験の最も高いレベルで、N5 は最も低いレベルである。表 1 を見ると、中国では N1 の受験者数が 38,106 人で最も多く、レベルが低くなるにつれ、受験者数が減っている。また、韓国でも中国同様の傾向が見られ、N1 の受験者数が 10,836 人で最も多く、N5 は 759 人で最も少ない。これに対して、インドネシアでは N3 が 9,986 人と最も多く、次いで N5 が 3,344 人となっており、最も少ないのが N1 でわずか 500 人である。

表 1　日本語能力試験の実施国・地域別受験者数

国名	受験者数（千単位）					
	N1	N2	N3	N4	N5	合計
中国	38	34	9	3	1	87
韓国	10	7	6	2	0,7	27
インドネシア	0,5	12	3	2	3	1

表 1 から、中国と韓国では N1 レベルを目指して受験する傾向がある一方、インドネシアでは N3 を一つの到着点として受験していることが分かる。このことから、インドネシアでは日本語学習者の能力が中国と韓国に比べると、低いと考えられる。

インドネシアは非漢字圏であり、インドネシア語の文法が日本語と違うことがその原因の一つとされているが、これ以外の原因もあると思われる。したがって、インドネシア人日本語学習者の能力が低い原因を具体的に分析し、向上させる方法を考察することが必要である。

先行研究と残された課題

これまでインドネシアにおける日本語教育の課題やその解決方法に関して様々な研究が行われてきた。土持（1994）、Danasasmita（2009）、Sutedi（2017）では、インドネシアの日本語教育の全般的な問題が記述され、その問題の解決方法が提案されている。しかし、土持（1994）は 1994 年の高等教育や中等教育における状況と課題を述べているため、現在とは状況が大きく変わる可能性があると考えられる。Danasasmita（2009）では日本語教育の主な問題はカリキュラム、教材、学習者のモチベーションと挙げられている。但し、Danasasmita（2009）では問題の解決方法が具体的に述べられていないため、より詳細にその点を明らかにすることが必要だと思われる。また、学習者のモチベーションの側面からは

e- ISSN 2528-5548

Kobari（2014）や Djafri（2018）で解明されているため、モチベーション以外の側面を解明する必要がある。

一方、Sutedi（2017）では日本語学習における問題が挙げられているが、主に高等教育（大学等）における日本語教育状況のみを述べているため、他の教育段階における日本語教育の状況を明らかにする必要がある。

この他に、高等教育における研究はハリ（2015）や Setiawati（2017）がある。ハリ（2015）では、Universitas Darma Persada（ジャカルタ首都にある大学）の日本語教育状況が明らかになっている。日本語教育の問題に関する結果は、ほぼ Danasasmita（2009）と同じであるが、ハリ（2015）はジャカルタには日本人が大勢いるため、日本人との接触が多いことを明確にした。また、Setiawati（2017）では開発したカリキュラム（Kurikulum 2012 と名付けられている）の実施について報告されている。しかし、ハリ（2015）と同じ、Setiawati（2017）でも特定の大学（Universitas Negeri Semarang）の状況のみを明らかにされているため、他の地域や教育機関の状況を明らかにする必要があると思われる。

一方、中等教育（小学校、中学校、高等学校等）における日本語教育状況に関する研究は篠山（2001）、藤長他（2006）、Herniwati（2015）がある。前述の Sutedi（2017）では高等学校における問題を挙げられているが、具体的には記述されていない。それらの問題はカリキュラム、教材、教授法、メディアなどのみが挙げられている。しかし、教材に関しては篠山（2001）で明らかにされているように、インドネシアの高等学校には教科書など日本語の教材は充分にあると言える。しかし、教師が自作教材を作成することが未だに少ないため、教材作成の研修が必要だと述べられている。この他に、藤長他（2006）は高等学校を中心に、Herniwati（2015）は中学校を中心にインドネシアの日本語教育状況を記述している。しかし、カリキュラムの側面は 2004 年までのカリキュラムのみが記述されているため、最新カリキュラム（2013 年）の現状を見る必要がある。

以上のことを踏まえ、本研究ではインドネシア人日本語学習者の人数が多いにもかかわらず、日本語能力が低い理由を検討しながら、教育の基本となるカリキュラムの側面から解決方法を考察していきたい。また、今回の研究では日本の文化に関心が高いバンドンにおける日本語教育機関を事例とする。

上記の研究範囲を考慮し、本研究の課題を以下のようにまとめる。

1. インドネシアでは学習者数が多いものの、日本語能力が低い原因は何だろうか。
2. 現在のインドネシアにおける日本語教育のカリキュラムはどのようなものがあるか。
3. 学習者の能力を向上させるために、どのような方法が提案できるか。

研究方法

インドネシア人日本語学習者の日本語能力を向上させる方法を考察するためには、まず、インドネシア人日本語学習者の数が急激に増加した原因を探る必要がある。原因を明確にすることによって、学習者のニーズも明らかになると考えられる。そこで、まず、国際交流基金による日本語教育機関などについての統計データを分析し、それに基づき、学習者のニーズを考察する。

次に、第 1 バンドン国立高等学校（SMAN 1 Bandung）の日本語教師 2 名にインタビューを行い、現在の日本語教育カリキュラムについてのデータを収集する。そのデータに基づいて現在のカリキュラムが学習者のニーズに合っているかどうかを分析する。さらに、教育現場でカリキュラムに沿って教育が行われているかどうかを確認するために、第 1 バンドン国立高等学校で使用されているシラバスと教案のデータも分析する。

最後に、カリキュラムと学習者のニーズが合っていない、あるいは問題がある場合、その解決方法も考察する。

調査結果と考察

インドネシア人日本語学習者数の増加原因

表 2　国際交流基金（2014）による教育段階別日本語学習者数

教育段階	学習者数	割合
初等教育	5,750	0.7%
中等教育	835,938	95.8%
高等教育	22,081	2.5%
その他	8,642	1.0%
合計	**872,411**	**100.0%**

e- ISSN 2528-5548

まず、インドネシア人日本語学習者数の増加の原因について見ていきたい。

表 2 を見るとインドネシアにおいて中等教育は学習者数の割合が圧倒的に高く、95,8%に達している。そのため、本研究では高等学校の日本語カリキュラムに着目したい。

現状を見ると、高等学校で日本語が行われているのは新しいことではない。インドネシアの高等学校では、2 年生になってから学生が理系のクラスと文系のクラスに分かれるが、学校によって学生が理系、文系、言語系の 3 つのクラスに分けている学校もある。言語系のクラスでは英語以外の外国語が必修科目となっている。そのために、学校が日本語、中国語、ドイツ語、フランス語、アラビア語の中から選択し、言語系の必修科目のみとして行っている。

しかし、2006 年に政府が KTSP カリキュラムという全国教育の基本となるカリキュラムを決定したことで日本語を行っている学校が増えたと思われる。KTSP カリキュラムでは科目の種類を増やし、各科目の学習時間を短くするという特徴がある。また、どのような科目を追加するかは各学校に任されており、追加された科目は理系、文系、言語系を問わず、その全学校必修科目となったのである。

これに加えて、近年、インドネシアでは日本企業が増えつつある。そこで、就職のことを考慮してこの機会を利用し、日本語を始める学校が増えてきたと考えられる。これらのことから、2006 年から 2009 年まででインドネシアの日本語学習者数が飛躍的に伸びた原因は KTSP カリキュラムの実施にあることが明らかになった。

しかし、2013 年に再びカリキュラムの変更が行われた。2013 年からは、KTSP ではなく、2013 カリキュラムが全国の学校の基本カリキュラムになっている。2013 カリキュラムの特徴は科目の種類を減らし、各科目の学習時間を増やすという KTSP の真逆のものである。そのため、日本語を含め、英語以外の外国語の授業を削除した学校もある。このことから、2015 年にインドネシアの日本語学習者数が減少した原因はカリキュラムの変更にあるといえる。ただし、学習者数が減少しても、インドネシアの日本語学習者では依然として中等教育での人数が最も多い。

次に、インドネシアの高等学校における日本語教育のカリキュラムの実施について記述していきたい。

インドネシアの高等学校における日本語教育

ここでは、2013 カリキュラムを実施している高等学校の日本語教育実施とその問題点について述べていきたい。

正確に現場の状況を把握するために、筆者はバンドンにある国立高校の日本語教師 2 名にインタビューし、使用されているシラバスや教案を分析した。その結果を以下に記述する。

2013 カリキュラムでは理系・文系・言語系のクラス分けは 1 年生から決定されている。日本語は言語系の必修科目又は全学生の選択科目として行われている。しかし、第 1 バンドン国立高等学校では 2013 カリキュラムを使用しているのは 1 年生のみであり、2 年生と 3 年生はまだ KTSP を使用しているとのことであった。

2 年生と 3 年生は KTSP を使用しているため、日本語はクラスにかかわらず、全学生の必修科目となっている。それに対して、第 1 バンドン国立高等学校では言語系のクラスはないため、2013 カリキュラムを使用している 1 年生では、日本語は全学生が選べる選択科目となっている。これらを見ると、第 1 バンドン国立高等学校では 2013 カリキュラムの実施がいまだに統一していないことが把握できた。

実際、第 1 バンドン国立高等学校のみならず、インドネシア全国的にも 2013 カリキュラムの実施がまだ統一されていないと被験者が述べている。インドネシアの教育カリキュラムでは「選択科目」という概念が 2013 カリキュラムで初めて紹介されているため、慣れていない学校は 2013 カリキュラムの実施にあたって準備する必要があると思われる。その準備のスピードが学校により異なるため、現在、2013 カリキュラムの実施が統一されていない状況になっていると考えられる。

それでは、第 1 バンドン国立高等学校の日本語教育現場において KTSP と 2013 カリキュラムの内容・実施事態はどのように違うのだろうか。

表 3 は日本語教育における KTSP と 2013 カリキュラムの違いについての第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師へのインタビュー結果のまとめである。

e- ISSN 2528-5548

表 3　KTSP と 2013 カリキュラムの違い

項目	KTSP（2-3 年）	2013（1 年）
学習時間	72 時間 x 3 年 = 216 時間	108 時間 x 3 年 = 324 時間
必修・選択	必修	選択
学生人数／学年	20 組 x 約 40 人＝800 人	3 組 x 約 40 人＝120 人（11 組から）
教材	Mari Mengenal Bahasa Jepang （西ジャワ州日本語教師会より）	Sakura（国際交流基金より）
学習の重視点	認知と精神運動を重視	献身を重視

国際交流基金によると、N5 を合格するには 150 時間、N4 には 300 時間日本語を学習する必要がある。表 3 の「学習時間」を見ると、KTSP では 1 年間で日本語の授業がおよそ 72 時間行われている。つまり、高校過程 3 年間の合計時間はおよそ 216 時間である。これに対して、2013 カリキュラムでは 1 年間で日本語がおよそ 108 時間行われ、高校過程 3 年間の合計時間はおよそ 324 時間である。

これらのことから、KTSP では高校過程 3 年間で N5 以上 N4 以下のレベルが目標となっているのに対して、2013 カリキュラムでは高校過程 3 年間で N4 とほぼ同じレベルが目標になっていることが分かった。

したがって、インドネシアの学習者数が多いにもかかわらず日本語能力が低い原因は、学習者の大伴が高等学校で学習し、学習の目標レベルが N5 以上 N4 以下又は N4 相当のレベルであるためだと考えられる。

また、表 3 に示した第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師による、2013 カリキュラムの長所は以下のとおりである。

1. 学生は自分の意思で日本語の授業を選択したため、勉強のへのモチベーションは KTSP より高い。
2. 学習時間がより長いため、KTSP より学習目標もさらに高くなる。
3. 学生が非常に授業に興味を持っているため、教師が指導しやすい。

しかし、教師は 2013 カリキュラムではまだ多くの欠点があると述べている。その欠点は、献身を重視する点である。「献身」とは授業中の姿勢であり、授業の内容自体には関係ないものである。第 1 バンドン国立高等学校の日本語教師によると、言語の学習では認知（知識）と精神運動（知識をどう活かすか）も重視しないといけないという意見がある。そのため、日本語の学習には KTSP が最も合っているカリキュラムではないかと述べている。

このように献身を重視することによって、学生は競争心を失い、より多くの知識を得る必要性を感じていないと言えるだろう。そのため、教師は 2013 カリキュラムでは学生の日本語習得が遅くなるととらえていると考えられる。

しかし、インタビュー結果で明らかになったように、学習者数、学習時間、学生のモチベーションの面から見ると、教師は日本語の学習がより効率的に実施できると確信している。そのため、日本語の学習には 2013 カリキュラムが最も良いと考えられる。確かに、2013 カリキュラムにはまだ多くの欠点・課題があるが、それを改善すれば、より良い日本語教育の実施が期待できよう。

インドネシアの高等学校における日本語教育

以上の考察を踏まえ、2013 カリキュラムにおける日本語教育の改善方法について考察していく。

2013 カリキュラムの改善方法について３つの方法が考えられる。1 つ目は、2013 カリキュラムの実施を全国で統一するように働きかけることである。学校だけでなく、政府からも各学校における 2013 カリキュラムの実施に対してサポートする必要がある。例えば、説明会の実施、カリキュラムコンサルタントの用意などが考えられる。

2 つ目は、献身だけではなく、認知・精神運動も重視することである。具体的には、授業で充分な知識を得て、その獲得した知識を日常生活にも活かし、人間としてより良い姿勢が持てることを目標とするなどが考えられる。そうすると、3 つの要素のバランスが取れて、より良い学習成果が出るのだろう。

3 つ目は、高等学校では高いレベルの日本語まで学習する必要がないため、今の学習レベルでも良いと思われるが、日本語の授業内容をより効率的に習得できる教授法を考える必要があると考えられる。

e- ISSN 2528-5548

おわりに

以上、本稿では、インドネシアの中等教育における日本語学習者数の増減はカリキュラムの変更が原因であることが明確になった。さらに、 インドネシアの学習者数が多いにもかかわらず日本語能力が低い原因は、学習者数の多くが高等学校で学習し、学習の目標レベルが N5 以上 N4 以下又は N4 であることが明らかになった。

また、学習者数、学習時間、学生のモチベーションから見ると、インドネシアの高等学校における日本語の学習には 2013 カリキュラムが合っていると考えられる。しかし、前節で述べたように 2013 カリキュラムではまだ欠点があるため、さらに改善が必要と考えられる。

本研究では教授法、教科書、教師からの面に触れていないため、これらの点については今後の課題とする。また、他の教育機関における問題と解決方法についてもまだ明らかにする必要が多少ある。例えば、高等教育では高いレベルを目指すため、どのような問題があるかを明らかにし、その問題の解決方法を検証する研究が望まれる。

参考文献

Danasasmita, W. (2009). Pendidikan Bahasa Jepang di Indonesia Sebuah Refleksi. *Repositori UPI*. Universitas Pendidikan Indonesia.

Djafri, F. (2018). Analisis Naratif pada Proses Pembelajaran Bahasa Jepang di Perguruan Tinggi dan Pengaruhnya terhadap Pilihan Masa Depan Pembelajar setelah Lulus. *Jurnal Lingua Aplicata*, *1*(2), 1-18.

Herniwati. (2015). Kurikulum Berbasis Kompetensi Komunikatif Bahasa Jepang untuk Meningkatkan Kemampuan Berbicara pada Sekolah Menengah Pertama (SMP) (Desertasi). Universitas Pendidikan Indonesia.

Kobari, N. (2014). Penelitian Dasar Terhadap Motivasi Mahasiswa yang Memilih Keahlian Pendidikan Bahasa Jepang. *Jurnal Bahasa & Sastra*, *14*(2), 117-130.

Setiawati, A. S. (2017). Keefektivan Penerapan Kurikulum Tahun 2012 Pada Prodi Pendidikan Bahasa Jepang Unnes. *Proceeding Seminar Internasional Dinamika Perkembangan Bahasa Jepang di Indonesia*, 39-49.

Sutedi, D. (2017). Dinamika Perkembangan Pendidikan Bahasa Jepang di Indonesia dan Permasalahannya. *Proceeding Seminar Internasional Dinamika Perkembangan Bahasa Jepang di Indonesia*, 7-13.

国際交流基金（2015）「2015 年第 2 回　日本語能力試験　実施国・地域別応募者数・受験者数」独立行政法人　国際交流基金

国際交流基金（2016）「2015 年度海外日本語教育機関調査結果」独立行政法人　国際交流基金

国際交流基金「インドネシア（2014 年度）」＜https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/indonesia.html＞（2016.12.20 時点）

国際交流基金「旧試験　新試験　級　認定基準」＜https://jlpt.jp/about/pdf/comparison01.pdf ＞（2017.2.17 時点）

篠山美智子（2001）「インドネシアの日本語教育における教材に関する日本の協力―後期中等教育を事例として―」. *Journal of International Development and Cooperation, 8* (1), 51-66. 広島大学.

土持かおり（1994）「インドネシアにおける日本語教育の現状―西ジャワを中心に―」*『鹿児島県立短期大学紀要.人文・社会科学篇』*, *8*, 31-43. 鹿児島県立短期大学.

ハリ・スティアワン（2015）「特集　アジアの中の日本　インドネシアにおける日本語教育事情」*『日本研究教育年報』19*, 157-163. 東京外国語大学.

藤長かおる・古川嘉子・エフィ ルシアナ（2006）「インドネシアの高校日本語教師の成長を 支援する教師研修プログラム」*『日本語教育紀要』2*, 81-96. 国際交流基金.

e- ISSN 2528-5548